YOUTH CLUB

2023 年 10 月号（No.16）
公益社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
東京都千代田区四番町 5-4
https://www.jac1.or.jp

3 カ月に一度発行する「山」YOUTH 版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部の YOUTH CLUB の取組みなどをご紹介していきます。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております！

［編集担当］
松原尚之
滝沢守生
谷山宏典
田島圭悟
新井　梓

カナディアン・ロッキーでクライミング
第 1 回 カナダ・ユース合宿

6 月 23 日から 7 月 5 日にかけて、初めてのカナディアン・ロッキー合宿が実施された。これは全国のユース世代の会員によって 3 カ年かけて行われるカナダ合宿の第 1 回目の報告。

参加したメンバー全員がレイク・ルイーズに集合

今年のカナダはクライミングが中心の合宿となった。初日にマザーズデイ・バットレスという 8 ピッチのマルチを登り、その後は、トンネルマウンテン、EEOR いったマルチを登った。バンフの裏山であるトンネルマウンテンは、登り切って山頂に立つとバンフの街全体を見下ろすことのできる楽しいルートだった。マルチピッチのあいまには、ショートルートの岩場も 3 カ所訪れた。これらはマルチの岩場とちがって岩質もよく、特にグラッシーレイクとレイク・ルイーズは、ここを目的に登りに来たいと思えるくらい質の高い岩場であった。

今回のメンバーは東海支部、広島支部、本部ユースから集まった 7 名であったが、よいチームワークで、楽しい日々を過ごすことができた。ベースとなったキャンモアの町では、グラッシーハイツという貸し切りの一軒家のような宿で共同生活を送った。外のデッキには立派なバーベキューコンロがあり、夕食はもっぱらこれを使って料理した。ある夜には、谷剛士をはじめとするキャンモア在住の日本人ガイド、クライマーら 5 名が私たちの宿に集まってくれて、楽しく、とても貴重なひとときを過ごすことができた。

7 名全員での登攀は、タカカウ・フォールという大迫力の滝の横を登っていき、しかも最後に 50m 近い狭い洞窟を這って滝の落ち口に飛び出すという、世にも稀なるルートを登って終了となった。一足先に帰国の途につく大田、井上、涌嶋を見送ったあと、松原、山田、大野、草野はコロンビア・アイスフィールドへ移動。残念ながら私だけ体調不良で留守番になってしまったが、山田、大野、草野の 3 名が、標高 3,491m のマウント・アサバスカの登頂に成功した。クライミング中心のツアーの中で、最後にアサバスカを経験できたことは、とても重要なことだったと感じている。カナダ合宿は来年、再来年と継続される。来年はまた新しい仲間と、また私たちの知らないカナダに出会えることを楽しみにしている。　（松原尚之）

タカカウ・フォールをリードする大田由孝（広島支部）とビレイする草野駿希（東海支部）

再びの未踏峰（後編）

ジャルキャ・ヒマール (6,473m) の初登頂をめざした関西支部の竹中雅幸さんによる手記の後編。２度にわたる未踏峰への挑戦から学んだヒマラヤ登山の難しさ。

東峰南稜 5,200m より。右から東峰、本峰。
氷河ルートの核心部は雲の中

2022 年初夏に遠征メンバー 4 名が決まり、八ヶ岳や岳沢周辺で 2 度の合宿を行った。出発前日にはミウラドルフィンズにて 4,500m 相当の環境を体験。そして 2023 年 3 月 30 日、私にとっては 2 回目となるジャルキャ・ヒマール遠征が始まった。

現在、ネパールでは各地で道路工事が行われている。今回訪れたマナスル山域も例外ではなく、3 年前に比べ工事が進んでおり、前回より徒歩でのキャラバンを 1 日短縮できた。ただし崖を爆破してつくられたダート道は恐ろしい揺れ具合で、何事も起こらないことを天に祈らざるを得ない。4 月 5 日にカトマンズを出発し、翌6日にはマチャコーラよりキャラバンを開始したが、私は埃と暑さにやられて早速熱を出してしまった。出だしからつまずく自分の体にいら立ちが募るが、焦っても仕方がない。体調不良のなか歩き続けることとなったが、幸い熱は数日で収まった。サマ村で高所順応のためマナスル BC 方面へ 1 日、散策の日を入れ、キャラバン 7 日目には最奥のサムド村 3,900m に到着した。

前回の BC よりもやや上流により広い適地が見つかり、4 月 15 日、4,560m の BC に入る。早速偵察を開始し、当初考えていた本峰より流れ出る氷河ルートより、東峰から南にのびる尾根（東峰南稜と仮称）が登りやすいのではという結論に至る。ここで一旦話し合いがもたれ、咳が激しく出ていた私は偵察組ではなく、BC 裏山の比較的穏やかな尾根を往復して順応を図ることとなった。偵察組から 5,600m 付近にキャンプ適地がありそうだという情報がもたらされた翌日から、雪のため 5 日間連続の停滞となる。約 3 週間の登山期間はあっという間に折り返しとなり、4 月 26 日、1 回目のサミットプッシュに出る。27 日、南稜取り付きに設けた ABC を早朝出発。5,200m で尾根上に出て東峰と本峰を望む。5,400m 付近ではロープを出して岩場を越える。単純な尾根だと考えていたが、実際の地形は複雑で巨大な窪地や岩場に惑わされ、この日は 5,600m まで。天気予報で好天が予想されていたのは翌 28 日のみ。夜明け前から行動し、荷を軽くしてラッセルをまわす。6,000m の台地は広大で、国境稜線までなかなか到着しない。それでも粘って 13 時には稜線に乗るが、東峰手前の 6,300m 付近に地図では読み取れなかった小ピークが存在し、風上となる西側に回り込むと硬い氷の斜面となる。雪尾根を想定していたため、装備も時間も厳しく、撤退を決める。

1 日のレストを挟んで、5 月 1 日、ラストチャンスで当初予定していた氷河ルートを目指す。天候はよくなくガスの中、右往左往しながら初日は 4,950m まで。翌 2 日はルート工作隊と荷揚隊に分かれて行動。しかしここでメンバーの 1 人が 5,550m 付近でクレバスに転落し、片方のアイゼンを失う。けががなかったのは不幸中の幸いだった。BC には予備のアイゼンがあったが、焦りや疲れが出てきていることは否めず、3 日、登山の終了を決めた。

今回、自分はキャラバン中、登山期間、そして実は下山後においても体調不良に悩まされ続けた。あまりにも情けない自身の体にはうんざりさせられたが、最後は「信じる」しかない、と思うようになった。体調、仲間、天候、すべてを受け入れて、最後は報われることを信じる。思い通りにならないのがヒマラヤ登山だという当たり前の話ではあるが。山に教えてもらったことを忘れず、いつか報われる日を信じて、ちっぽけな努力をこれからも積み重ねていきたい。

（関西支部　竹中雅幸）

“クライミングレジェンド”池田功インタビュー（後編）

日本のフリークライミング黎明期を異次元の発想と実力でリードした池田功さんのインタビュー後編。日本山岳会に新たな息吹をもたらしてくれることに期待！

――80 年代中頃、まだ 20 代半ばだった池田さんはクライミングの第一線から退かれます。その後は仕事に専念を？

池田　ええ。アルバイトをしていた石材会社でそのまま働いていました。専門学校で設計の勉強をしていて、建築石材の施工図面を描けたので、会社では重宝がられていたんです。その後、別の石材会社にスカウトされて、正社員に。その会社では、設計施工のほか、国内外の工場の立ち上げ、製品の営業・販売、海外での原石の調達など、ひと通りの仕事を経験しました。取締役までやらせてもらい、仕事は充実していました。けれど、バブル崩壊でサラリーマン生活に限界を感じ、辞めてしまったんです。40 歳前後のことですね。

――退職後は？

池田　親戚の家に出入りしていた植木屋から声をかけてもらい、仕事を手伝うようになりました。それが造園業に入るきっかけです。

――庭師の経験は？

池田　まったくのゼロでした。ただ、岩登りをしていたので「高いところは得意だろう」と、高木の剪定を専門的に任せられ、先輩から「あそこを切れ、ここを切れ」と教えてもらいながら技術を短期間で身に付けていったんです。現在では、クライミングのロープワークを応用して、独自の高木作業のシステムも確立しています。

――クライミングが仕事にいきているわけですね。

池田　そうです。海外でも仕事をさせてもらい、2014 年には環境省の日仏文化交流事業で 10 人の庭師の 1 人に抜擢されて、フランスのヴェルサイユ宮殿で菊花壇を手がけたり、2019 年には国土交通省のプロジェクトでアメリカ・シカゴの日本庭園の石組みなどの修復に携わらせていただきました。

――庭師としても「石」に関わっているのですね。

池田　これまで自分がやってきた 3 つのこと――クライミングと石材業と造園業に共通しているのは「石」なんです。今後の人生、自分自身の集大成として、この 3 つを融合できればと。

――融合とは？

池田　日本全国にボルダーのある公園を作ることです。日本のボルダリングって室内でホールドをつけた壁を登るのが主流になっていて、それはひとつのスタイルとして否定はしませんが、本来のボルダリングってそうじゃないと思うんです。

　僕が御岳でボルダーを開拓したのは、ハイキングやカヌーをやる人の横で、岩を登る人がいたらいいなという思いからで。自然の中での遊びや学びの場というイメージだったんです。

　今考えているのは、自然の岩石を運んできて、それを組み合わせて作るボルダーです。人工的に作るので世界最難ルートもできますが、目指しているのはそこではなく、僕がやりたいのは子供たちの教育というコンセプトなんです。

　目標に向かって何度もトライしたり、頑張って手を伸ばすことって、大事なことじゃないですか。各地にボルダーのある公園を作り、子供たちにそういう経験を積んでもらいたいんです。クライミングと石材と造園。この 3 つが揃っているのは、たぶん日本で僕だけじゃないですか（笑）。ボルダーの名前もすでに決まっているんですよ。

――どんな名前ですか？

池田　「忍者返し」です（笑）。日本全国、さらには世界へと忍者返しを広めていきたい。それが僕の今の夢なんです。**（聞き手＝松原尚之、谷山宏典）**

＊「再びの未踏峰」と「池田功インタビュー」の前編は「YOUTH CLUB 山」7 月号に掲載→

恒例の御在所フェスティバルが開催

今年は全国の支部に加え、カナダからの豪華なゲストを迎え、三重県・御在所岳で 10 年以上も続く若き岳人たちの秋の祭典、御在所フェスティバル（ゴザフェス）が開催。

藤内小屋の前に集まった全国ユースの面々

9 月 23 日（土）～ 24 日（日）の 2 日間、ゴザフェス（御在所フェスティバル）が今年も開催された。すでに 10 年以上続いているこのイベントはもともと東海学生山岳連盟の学生たちが主になって催されてきたが、今年は東海支部が主催し、山岳会内でより広く参加を呼びかける形で実施された。結果、約 50 名の参加者のうち学生が半数、もう半数が本部ユースクラブ、広島支部、関西支部、信濃支部など各地から集まった顔ぶれとなった。今年はゲスト講師として、ふだんはカナダ在住の谷剛士、山田利行（ともに東海支部）の 2 人のプロガイドも参加。初日は一の壁で 2 人による講習が実施された。藤内小屋では東海支部の方々が豪華な夕食を用意してくださり、楽しい宴となった。2 日目は、前尾根、中尾根、一般登山パーティーに分かれ、御在所岳山頂を目指した。例年だと遅れるパーティーもいて、山頂で全員集合とはなかなかいかないそうだが、今年は中尾根から懸垂下降で下った 4 人をのぞいて全員が山頂に集結することができ、集合写真を撮ることができた。

久しぶりにゴザフェスに参加して感じたことは、日本山岳会のさまざまな支部のメンバーが集って交流する楽しさに加え、たくさんの学生たちが同じイベントに参加している素晴らしさである。東海支部と東海学生山岳連盟の学生たちとのつながりは、ユースクラブと学生部の関わりを考える上でも、示唆に富むものであった。　**（松原尚之）**

北ア・穂高岳ユースクラブ夏合宿に参加して

2023 年 8 月 10 日から 12 日にかけて、涸沢をベースキャンプに実施されたユースクラブの夏合宿に参加した信濃支部の高橋湧太さんのリポート。穂高周辺のバリエーションルートの中でも人気の高い北穂高岳東稜をはじめ、北アルプスの夏を仲間と満喫した 3 日間。

8 月、ユースクラブ講習企画の北穂高岳東稜に参加させていただきました。これから穂高など日本アルプスでの山行にクライミング要素を織り交ぜていきたいと思う一方で、その様子がわからない状態の私にとって、松原さんや同行の方々の身体技法やロープワークをまさに現場で間近に見ることのできたとても良い機会でした。また、涸沢 BC2 泊を通じて参加された皆さんから様々なご経験をお聞きすることができ、刺激をいただくと共に、個人的な交流を深められたことも素晴らしかったと思います。それぞれの自然の楽しみ方が少しずつ異なり、しかし大別すれば同じ方向にあり、そうした違いを楽しみながら、山に関連する会話が絶えない場はなかなか日常にはありません。そのような点でも貴重な機会でした。今後もユースクラブの企画に参加して、自分の興味関心を発展させていけたらと思います。同行して下さった皆さま、このたびは本当にありがとうございました。　**（信濃支部　高橋湧太）**

前穂北尾根のはるか遠方に富士山を望む